

「男も女もみんなフェミニストでなきゃ」を読んで

私は日本へ留学しに来る前、すでに日本の人気ドラマ『おしん』を見たことがある。小さい頃に極貧やいじめを耐え抜いて、還暦を迎えた後に車の運転にチャレンジする主人公は一番印象的だった。ただし、日本で近年に入試や仕事における男女差別の問題は深刻な実態になっている。これは私が今回「男も女もみんなフェミニストでなきゃ」を選んだきっかけである。

この本は作者であるチママンダ・ンゴズィ・アディーチェによる 2012 年 12 月の TEDxEuston で行われた会議を舞台にした話である。「フェミニストとは、社会的・政治的・経済的に両性が平等だと信じる者」という結論が主張された。

「私たちの社会は、ある年齢までに結婚しない女性に、それが深い個人的な欠点だとみなすように教えます。ところが男性は、ある年齢までに結婚しなくても、そこまで選択を迫られることはありません。」私はこの言葉が心に残った。中国では、ある年齢までに結婚しない女性に、「剩女」と呼ぶ。文字通りに、余った女の意味を表す。そして、「敬意」という語は女性が男性に対して示すものとして使われますが、男性が女性に示すものとして使われることはそれほど多くありません。」という部分を読んだ時、日本の女性は自分の夫を「主人」と呼ぶことを思い出した。「主人」という言葉は財産と権力の支配者であるという意味があって、この呼び方は明らかな男女差別ではないかと思う。また、私自身が 2016 年に体験したことだが、学部の卒業生として本学の 100 周年記念館で行われた葵友会に参加した。驚いたのは当日に参加者のうち、9 割以上は男性が占めた。

女性の社会活躍は日本が長年にわたって直面している問題である。ただし、約 30 年前の 1987 年、それも人気ドラマ『おしん』を放送した後 4 年後の 1987 年に、アクネス・チャンは生後数カ月の長男を連れてテレビや講演の仕事に復帰した。これはもちろん「早く復帰してくれ。子供を連れてきてもいいから」などと仕事先からの説得を受けた前提だった。当時に、社会学者の上野千鶴子氏は「働く母親の背中には必ず子供がいるもの」としてアグネスを擁護したが、周りの同僚から始まり、テレビや雑誌まで批判の声が大きかった。わずか 4 年で、「アグネス論争」はドラマから現実までもう一度『おしん』が意図した「高度経済成長の中で現代人が見失ってしまったものを提示し、問いかけよう」という問題を取り上げた。

2015 年に、日本では女性活躍推進法は確定されたが、男女格差はまだ著しい。2018 年に行われた世界経済フォーラムによれば、149 カ国中に男女格差を示すジェンダーギャップ指数の日本はなんと 110 位であって、2015 年に比べ、順位を 10 位落とした。この現状に目を向け、日本で育つ女の子たち、そして男の子たちが性別にとらわれず、今よりもっと自分らしい生きられる社会を目指すべきと私は痛感する。最近、多くの経営者は女性活躍を唱え始めている。カルビー会長兼 CEO の松本晃氏はカルビーの管理職に占める女性の比率を

引き上げることを目標としている。ユニクロの柳井正氏は自身の後継者について「女性たちは忍耐強く、細かい点に配慮し、美意識を備えている」まで言及した。また、フェミニズムの考え方に感化されたクリスチャン・ディオール史上初の女性アーティスティック・ディレクター、マリア・グラツィア・キウリは「自分の着たいものは自分が決める」と提唱した。これはまさか中国の歴史学名著である『戦国策』に書かれた「女は己を悦ぶ者のために容づくる」に反し、「女は己のために容づくる」にした有力な行動だと思う。

原始社会・戦争時代・工業革命に求められた「力」はきっと 21 世紀のソーシャル・イノベーションには求められない。新しい時代の科学技術の向上に男女ともに「智慧」が必要になってくることは間違いないと私が信じる。

この本と出会えて、私はフェミニストの大切さを知った。意識の変革は必ず長い月日を伴うが、自分は女性としての活躍も、これから微力ながらかけて続けたい。

以上